

〔調査報告〕

留学生の就職活動とキャリアに関する意識調査

—— 群馬大学留学生基本調査（2）からの報告 ——

園田 智子・俵山 雄司

要 旨

本研究は、2011年から2012年にかけて群馬大学に在学する全留学生を対象に、就職及びキャリアに関する質問紙調査を実施し、その結果を分析したものである。その結果、①留学生が就職先を考える際は、自分や企業の将来に関する要素を重視すること、②就職活動ではインターネットや留学生の先輩や同級生を主に活用し、日本人学生との情報交流は多くないこと、③就職支援として、「個別の面接指導」や「留学生を希望する企業との直接面接会」などを求めていることなどがわかった。本論では、これらの結果をふまえ、本研究の対象留学生に対し、必要とされている支援策についても考察する。

【キーワード】 グローバル人材 留学生 就職活動 キャリア 意識

1. はじめに

1. 1. 調査研究の背景

近年、グローバル人材養成の必要性が産業界から強く求められるようになり、日本の大学に在籍する留学生に注目が集まっている。また、留学生の中にも日本での就職を希望する学生が多くなってきている。それに伴い、高等教育機関や関連の機関において留学生の就職やキャリアに関する調査研究が様々に行われてきている。ここでは、日本政府が「留学生30万人計画」を発表した2008年7月以降に発表された調査研究の中から主なものをみることにする。

佐藤他（2009）は、理工系大学で学ぶ留学生を対象に質問紙調査を行い、卒業後の進路・企業選びの視点などについて分析している。その結果、60%以上が卒業後の日本滞在を望み、40%以上が日系企業への就職を希望していた。企業選びの視点としては、「将来性」「グローバル性」を重視する留学生が多数を占めたと報告している。

袴田（2009）は、静岡県的高等教育機関在籍の留学生と静岡県に事業所のある企業を対象とした調査で、回答者の半数以上が日本での就職を希望し、そのうちの4割程度が静岡県内での就職を希望しているという結果を得た。一方で、製造業からの求人の多さに比して、それに見合った専門分野の留

学生が不足していることもわかった。

土井（2011）では、愛知県が実施した調査を元に、留学生・日本人・企業の3者を比較しながら、留学生の労働市場について分析している。この調査では、留学生の約6割が地元である愛知県の企業を志望していること、日本人学生に比べ留学生の就職活動開始時期が遅いことなどが明らかになっている。

松井他（2011）は、岡山大学で学ぶ留学生を対象として就職意識に関する調査を行っている。その結果、中国人留学生は、他国からの留学生よりも会社の規模、将来性、業種・事業内容を重視していること、就職を希望する理由は日本で暮らしたいためであることなどがわかった。

廣瀬・槌田（2011）は、東京工業大学の大学院留学生を対象に調査を行い、女性・30歳未満・日本企業が進出している国や地域出身・3月末終了という要素を持つ留学生が内定を得やすいことが明らかになった。

山田他（2012）は、日本企業への就職意志を持つ九州大学の工学系留学生に対して調査を行い、就職先を決める際の判断基準として「グローバル企業」「外国人社員の存在」といった多様性に関する項目、「自分を高く評価する」「自分のやり方で仕事ができる」といった自らの能力に関する項目が積極的に捉えられていることを示している。

末廣（2012）は、栃木県の大学に在籍する留学生を対象にした調査で、留学生は就職活動に生かせる能力として「日本語能力」「専門知識」などを挙げる一方で、「母語の能力」「母国の事情についての理解や知識」を生かせると考えている割合は少ないと指摘している。

Castro 他（2012）は、大阪大学の留学生に対する調査から、日本語能力の高さが内定取得につながっている一方で、就職活動開始時期の早さは必ずしも内定取得につながるとは限らないことを述べている。

上で見たように、近年の留学生の就職意識や活動実態の調査では、「地方」「国籍」「専門分野（理工系）」といった要素に着目した調査や分析がなされている。

しかしながら、群馬大学においては、今まで、全学留学生を対象に、就職やキャリアに関する調査は実施されておらず、留学生がどの程度日本での就職を希望しているのか、また、就職活動のどのような点に困難を感じているのかといった情報はもちろん、就職活動を終えた学生の就職活動の実態も明らかではなかった。

1. 2. 研究目的

本調査では、就職活動前及び活動中の在学留学生と、就職活動を終了した在学留学生にそれぞれ別々の調査票を用いて調査を実施し、その実態や意識の差を明らかにすることを目的とした。就職活動前及び活動中の学生に対しては、日本での就職希望の有無や、活動している内容、必要としている支援、不安に思っていることなど就職に関する意識を中心に調査を行った。一方、就職活動を終了した学生に対しては、実際に行った就職活動や、最終的に決定した進路など、行動にも重点を置いて調

査を行った。

2. 調査概要

調査では、主に選択式による質問紙調査票を独自に作成し、研究者間で内容や表現を調整した後、日本語版と英語版を作成した。概要は以下の通りである。

質問紙の構造：Aタイプ（就職活動前及び活動中）、Bタイプ（就職活動終了）ともに、共通の構造で作成した。Ⅰ就職活動に関する考え方、Ⅱ就職活動状況・就職活動実績、Ⅲキャリア（仕事生活のあり方）についての考え方、Ⅳフェイスシートからなり、最後に自由記述欄を設けた。このうち、Ⅱにおいては、Aタイプは就職活動前及び活動中の留学生が対象であるため就職活動状況を、Bタイプは就職活動を終了した学生を対象としているため就職活動の実績を詳細に尋ねた。

調査時期：2011年10月～2012年12月

調査方法：質問紙調査法（日本語版・英語版有）

調査協力者：群馬大学に在籍する留学生（交換留学生、医学部・医学系研究科・保健学研究科在籍留学生を除く）に、調査者・大学事務職員を通して調査票を配布し、回収した。配布の際、調査者・大学事務職員が、学生が就職活動前あるいは活動中であるか、就職活動終了しているかを確認し、就職活動前及び活動中の学生には質問紙Aを、就職活動終了後の学生にはBを配布した。回答者は125名（回収率50.4%）で、そのうち有効回答数は122名（Aタイプ101名、Bタイプ21名）であった。就職活動を終えた留学生（Bタイプ）は、学部4年生及び修士2年生の一部に限られているためAタイプの協力者と比較して数は少ない。

表1 調査協力者内訳（Aタイプ）

性別	男：62 女：37 無回答：2
年齢	20歳以下：2 21-25歳：62 26-30歳：33 31-35歳：3 36歳以上：1
国籍・地域	中国：46 マレーシア：26ベトナム：11 インドネシア：4 台湾：3 バングラデシュ：2 イギリス、イラン、韓国、ケニア、コートジボアール、タイ、フィリピン、レバノン：各1
留学種別	学部生：45 修士生：29 博士生：10 研究生：15 無回答：2
所属	【学部】 工学部：42 社会情報学部：3 【大学院】 工学研究科：42 社会情報学研究科：5 教育学研究科：2 無回答：7
国・私費	国費：23 政府派遣：5 私費：64 無回答：9
滞日年数	平均 24.5ヶ月

配偶者	有：13 無：86 無回答：2
日本語力	①ほとんどわからない：3 ②簡単な言葉はわかるが、生活上でもまだ苦勞する：2 ③生活上で簡単な語彙や文法であればだいたいわかる：18 ④他の人の助けがあれば、 研究・学習をなんとかこなせる：37 ⑤研究や生活で使用する上でほとんど問題を感じ ない：34 ⑥ビジネスでも通用するレベル：6 無回答：1
英語力	①ほとんどわからない：1 ②簡単な言葉はわかるが、生活上でもまだ苦勞する：10 ③生活上で簡単な語彙や文法であればだいたいわかる：19 ④他の人の助けがあれば、 研究・学習をなんとかこなせる：22 ⑤研究や生活で使用する上でほとんど問題を感じ ない：29 ⑥ビジネスでも通用するレベル：20
アルバイト経験 ※複数選択可	①飲食店などサービス業：52 ②家庭教師・語学教師：17 ③新聞配達：5 ④一般事 務：4 ⑥工場勤務：10 ⑦大学内業務：4 その他：9
正職経験	日本で有：5 母国で有：20 ※職種は多い順に、技術職：12、開発職：2、事務営業職：3、人事管理職：2、研究 職：1、教育職：1、金融関係専門職：1、その他：3
インターン経験	日本：有12（コンサルティング、設計技術関連等） 期間：10日～半年 母国：有12（技術職、製品工業、教師、記者等） 期間：1週間～半年

表2 調査協力者内訳（Bタイプ）

性別	男性：12 女性：7 無回答：2
年齢	21-25歳：11 26-30歳：8 無回答：2
国籍・地域	中国：9 ベトナム：4 韓国：2 ケニア、コロンビア、タイ：各1 無回答：3
留学種別	学部生：6 修士生：13 無回答：2
所属	【学部】工学部：4 社会情報学部：1 【大学院】工学研究科：13 教育学研究科：1 無回答：2
国・私費	国費：7 私費：12 無回答：2
滞日年数	平均 48.7ヶ月
配偶者	有：1 無：18 無回答：2
日本語力	①ほとんどわからない：0 ②簡単な言葉はわかるが、生活上でもまだ苦勞する：0 ③生活上で簡単な語彙や文法であればだいたいわかる：0 ④他の人の助けがあれば、 研究・学習をなんとかこなせる：6 ⑤研究や生活で使用する上でほとんど問題を感じ ない：8 ⑥ビジネスでも通用するレベル：5 無回答：2
英語力	①ほとんどわからない：0 ②簡単な言葉はわかるが、生活上でもまだ苦勞する：4 ③生活上で簡単な語彙や文法であればだいたいわかる：2 ④他の人の助けがあれば、 研究・学習をなんとかこなせる：6 ⑤研究や生活で使用する上でほとんど問題を感じ ない：3 ⑥ビジネスでも通用するレベル：3 無回答：2
アルバイト経験 ※複数選択可	①飲食店・販売などサービス業：17 ②家庭教師や語学教師：5 ③新聞配達：0 ④ 事務仕事：5 ⑤工場労働：7 ⑥通訳：3 ⑦その他：1 無回答：2
正職経験	無：9 日本で有：3 母国で有：7 無回答：2 ※職種は多い順に、技術職：5、開発職2、営業職1、販売・サービス関連職業：1
インターン経験	日本：有9（技術職、開発等） 期間：3日～1か月 母国：有4（開発等） 期間：2週間～3か月

回答者は、Aタイプ・Bタイプともに理工系の学生が圧倒的に多く、文系の学生が少ない。これは、群馬大学の部局別の留学生在籍数を反映している。国籍は、A・Bに共通して、中国が最も多い。Aにはマレーシアが多いが、Bには一人もいないが目立つ。マレーシアの学生のほとんどはマレーシア政府派遣の学生であり、母国への帰国を前提とした留学であるためだと考えられる。

日本語力については、支援があれば研究・学習をこなせるレベル、あるいは研究や生活には支障がないレベルと自己評価している学生が多い。ビジネスでも通用するレベルとした学生は、Aタイプでは少ないが、Bタイプでは一定の割合存在する。もともと日本語力の高い留学生在が最後まで就職活動を継続しているか、あるいは、就職活動を経て、そのように自覚するに至ったのではないかと推測される。一方、英語力は学生によってばらつきがあり、かなり低いレベルの学生もいるのに対し、ビジネスレベルの英語力があると自己評価している学生も少なくない。

就業の経験についても聞いた。その結果、母国で正職員としての経験を持っている学生がAタイプで約20%、Bタイプで約33%いることがわかった。また、インターンについても、日本や母国で様々な経験を持っている留学生在がいることがわかる。なお、インターンの期間は、日本では多くが1か月以内であったが、海外ではほとんどが1か月以上であった。

3. 調査の結果

ここでは、就職活動前及び活動中と、就職活動終了後という学生のタイプごとに調査結果をまとめる。

3. 1. 就職活動前及び活動中の留学生の調査結果詳細（Aタイプ）

I 就職やキャリアに対する意識

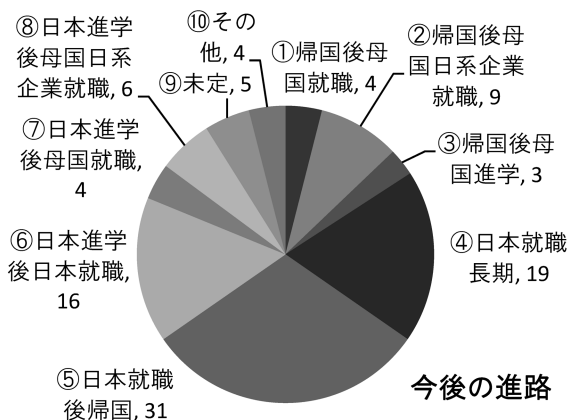
Q1 今後の進路について

回答した留学生のうち68名(55%)

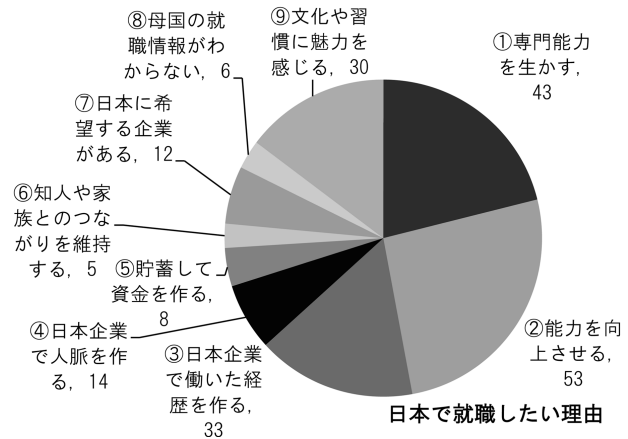
が、日本での就職を希望している。最も多かったのは、「日本で就職し、何年か働いてから帰国する」の31名で、次いで「日本で就職し長期間働く」の19名となっている。

Q2-1 日本で就職したい理由

Q1で日本での就職を希望したもに対して、就職したいと考える理由について、10の選択肢から3つを選択してもらった。「自分の能力を



向上させるため」と回答したものが53名と多く、社会に出た後も継続して自分の能力を伸ばしたいという留学生の向上心の高さがうかがえた。また、43名が「大学で学んだ自分の専門能力を生かすため」と回答しており、大学における専門性を生かすことを重視していることがわかる。さらに、留学期間を通し、日本の文化習慣に魅力を感じ、日本で就職を目指す学生も少なくない。



Q 2-2, 2-3 就業希望年数及び就業希望地域

日本での就職希望者の就業希望期間については、3年以内、3～5年と回答したものが31名と約半数を占める一方、約18名がまだわからないと回答している。また、5年、10年と長期間の就職を希望しているものも30%近くいる。

また、就職希望地域（複数選択可）について、希望が多かったのは、「東京・その近郊」の27名、ついで「関東圏内」の23名、「どこでもいい」の21名で、地元「群馬県内」と回答した留学生は11名だった。

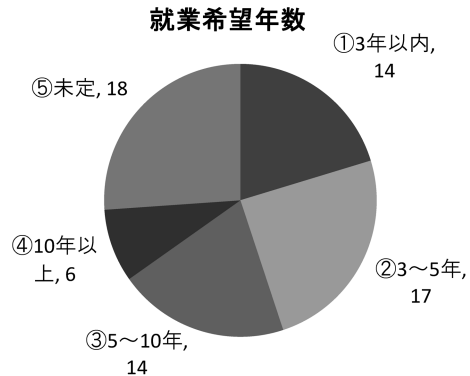
Q 3 就職先を選択する際重視する点

就職先を選択する際に重視する点について、16の選択肢から3つを選択してもらった。その結果、多い順に、「今までの自分の学習や研究を生かすことができる」52名、「将来の発展が見込まれる」39名、「自分のやりたいことができる」30名、「外国人への差別がない」27名となっており、留学生の多くが、自分自身の専門性を生かし、自己実現の可能な将来性のある企業を志向する傾向がうかがえた。

II 就職活動状況について

Q 1 就職活動状況

現在の就職活動状況について尋ねた。その結果、全体の53%にあたる54名が、日本で就職活動を「現在している・しようと思っている」としている。また、21名が「母国で就職しようと思っている」としており、残りの21名は、「就職活動をしなかった・するつもりはない」と回答している。なお、これらの留学生の中には進学も含まれている。



Q 2, Q 3 就職活動の内容・就職活動時に利用しているもの

Q 1 で日本での就職活動について「現在している。しようと思っている」と答えたものに、どんな就職活動を行っているか尋ねた。件数が多かったのは、「求人求職サイトへの登録」で35名、次に「教員・先輩・友人などに相談」で33名であり、次いで「就職活動情報や企業についてサイトや本などで調べる」26名、「就職活動で使われる試験(SPIやTOEIC等)を受けている」23名の順になっている。

また、就職活動時に利用しているものは、多い順に、「留学生の先輩」33名、「リクナビ」19名、「留学生の同級生」19名、「指導教員」16名となっている。一方、10件以下と利用が少なかったものには、「日本人の同級生」「群馬大学国際・教育研究センターの教職員」「就職したOBOG」「親・兄弟・親族」などがあつた。

このように就職活動前・活動中の留学生の情報源はインターネットからの情報や、周りの友人知人の狭いエリアに限られていることがわかる。

Q 4 就職活動にあたって希望する大学の支援

次に、就職活動中に大学に求める支援について11の選択肢から3つを選択してもらった。その結果、「個別の面接指導」(32名)や「留学生を希望する企業との直接面接会」(27名)など、就職に直結する具体的支援への要望が多い一方で、「自己分析の方法指導」(20名)など、就職活動を始める上での入口の部分の支援にも一定のニーズがあることがわかつた。

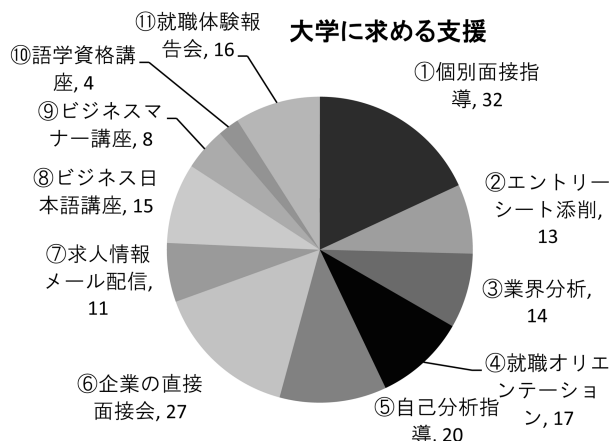


表 3 自信のある点・不安な点

	有	無
1. 性格	44	4
2. 環境適応力	47	2
3. 日本の知識	20	23
4. 母国の知識	36	7
5. 日本語力	17	20
6. 英語力	32	11
7. 母語他外国語力	39	10
8. コミュニケー力	35	10
9. 積極性	45	1
10. 専門知識・技術	16	12
11. 協調性	40	4
12. 独創力・発想力	26	4
13. 向上心	46	2
14. 自己管理能力	31	6
15. 忍耐強さ	42	3

Q 5 就職活動時、自信のある点と不安な点

15項目を挙げ、自信がある点には○印、自信がない点には△印を付けてもらった(表3)。全般的に自信があると答えた項目は自信がないと答えた項目よりも件数が多く、留学生が自分自身を高く評価していることがわかる。特に、積極性や向上心といった意欲に関する部分や環境適応力を高く評価していることがわかる。一方で、日本の知識や日本語力、専門知識の不足についての不安を持っていることも明らかとなった。

Q 6 就職活動に役立つ大学での活動・学習

大学での活動や学習で就職に役立つと思うものについて、7つの選択肢から3つを選んでもらった。その結果、

「専門の研究や研究発表」(38名)、「大学の教科科目の学習」(30名)のようにほとんどの留学生が大学での学習や研究が重要と考えている一方で、「ボランティア活動」(11名)、「サークル活動」(8名)のような課外活動については就職活動とあまり結びつけていない様子が見られた。

3. 2. 就職活動終了の留学生の調査結果 (Bタイプ)

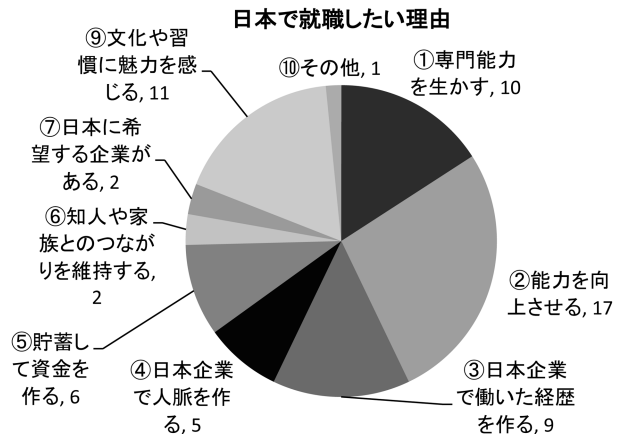
I 就職やキャリアに対する意識

Q1 今後の進路について

まず、今後どのように働きたいかを尋ねた。その結果、回答者の52%にあたる11名が「日本の企業で長期間働く」と解答し、8名が「日本の企業で何年か働いてから母国の企業に転職する」と答えた。この2つが全回答の90%を占めている。

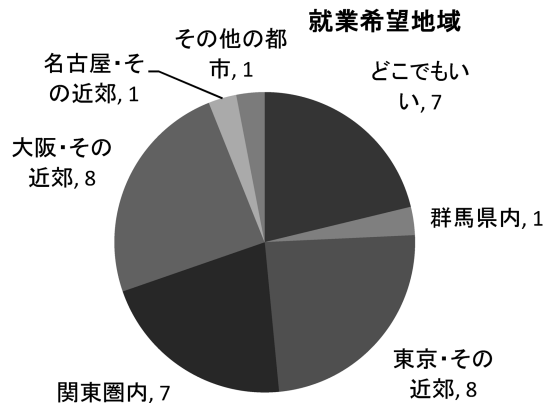
Q2-1 日本で就職したい就職の理由

日本で就職したいと考えた理由について、10の選択肢から3つを選択してもらった。「自分の能力を向上させるため」(17名、80%)「自分の専門能力を生かすため」(10名、47%)といった自らの能力に関する項目が多く選ばれた。「日本の文化や習慣に魅力を感じる」(11名、52%)「日本企業で働いた経歴を作るため」(9名、42%)が、これに続いている。



Q2-2, 2-3 就業希望期間及び就業希望地域

就業希望期間については、5年以下(「3年以下」「3~5年」)が9名、5年以上(「5~10年」「10年以上」)が10名でほぼ拮抗している。就業希望地域(複数選択可)については、「東京・その近郊」(8名)、「大阪・その近郊」(8名)、「関東圏内」(7名)、「どこでも」(7名)が上位で、「群馬県内」は1名のみであった。就職活動中とは異なり「大阪」が増え、「群馬県内」が減っている。これは内定先が決まり、配属が決まっていたり、配属の予定がある地域を答えていたりする可能性がある。



Q3 就職先を選択する際重視する点

15の選択肢から3つを選択してもらった。「今までの学習や研究を生かすことができる」(11名)、「将来の発展が見込まれる」(7名)、「先進的・高度な技術を持っている」(6名)、「自分の母国の発展に貢献している」(6名)が多く選ばれている。就職活動前・活動中に比べ後の2者が目立つのは、企業研究を行っている過程でこのような事実を知り、それをエントリーシートや面接での志望動機にしていたのではないかと推測される。

II 就職活動状況について

Q1 就職活動状況

就職活動の実績についても尋ねた。エントリーシート提出数は、平均18.2であった。提出数は、1社から100社まで幅があったが、多数提出した学生が必ずしも内定を得ているわけでない。学校推薦制度を利用したのは8名で、利用した学生は全て内定を得ていた。また、選考の結果として最終面接までたどり着いたのは、21名中20名で、最終面接回数の平均は2.9回であった。内定取得は、0件が4名、1件が11名、2件が4名、3件が2名となっていた。

Q4, Q5 就職活動時に利用していたもの・就職活動の内容

表4 就職活動時に利用したもの

利用したもの	数
リクナビ	20
マイナビ	16
日経ナビ	8
みんなの就活	5
大学キャリアサポートセンター	6
群馬県職業安定所・ジョブカフェ	1
学科や研究科の就職担当教員	2
国際教育・研究センター ML	3
国際教育・研究センター職員や教員	4
指導教員	8
留学生の先輩	6
日本人の先輩	4
留学生の同級生	6
日本人の同級生	6
就職したOB・OG	6
研究室や同じ学科研究科のメンバー	1
親・兄弟・親族	1

表4にあるとおり、就職活動時に利用していたものは、「リクナビ」(20名)、「マイナビ」(16名)、「日経ナビ」(8名)、「指導教員」(8名)が多く、「大学のキャリアサポートセンター」「留学生の先輩」「留学生の同級生」「日本人の同級生」「就職したOB・OG」(各6名)が続いている。活動中に比べ利用するリソースが増え、特に、同級生から情報を得る機会が増していることがうかがえる。

実際の活動としては、「企業説明会や合同セミナーに参加した」(20名)、「エントリーシートを作成したりエントリーした」(19名)、「大学内の就職説明会や就職セミナーに参加した」(18名)などをはじめとした多様な活動を、多くの学生が行っていた。「企業に在籍しているOB・OGを尋ねた」(7名)、「大学やハローワークなどで求人票や募集企業の情報を集めた」(8名)は比較的少なかった。

Q6 就職活動に役立った大学での学習・活動

7つの選択肢から3つを選んでもらった。その結果、「専門の研究や研究発表」(15名)「大学の教科科目の学習」(10名)「アルバイト」(10名)が多く選択された。「サークル活動」(4名)「インターンシップ」(4名)が比較的少なかったのは、そもそもそのような活動の経験がないということも影響していると考えられる。

Q7-1 就職活動中に利用した大学の支援

11の選択肢から3つを選んでもらった。利用者が多かったのは、「個別の面接指導」(12名)、「留学生を希望する企業との直接面接会」(9名)であった。ただ、後者は、実際に行われたのは面接会ではなく説明会であり、学生がそれを勘違いしている可能性が高い。その他、実際に大学が実施した支援については、それぞれ利用者が4~6名存在した。

Q7-2 就職活動中にやって欲しかった大学の支援

上記同様11の選択肢から3つを選んでもらった。無回答の10項目(2名が全て無記入、2名は2つが空欄)を除くと、「留学生を希望する企業との直接面接会」(9名)「個別の面接指導」(8名)が多くなっている。前者は実際には行われていないものだが、後者は実際に行われていた。大学で行われている支援についての情報が全ての留学生に行き渡っていなかった可能性が考えられる。

4. 考察と今後の課題

これまでの調査結果をもとに、現状の考察と必要な支援について指摘したい。

まず、考察の前提として述べておきたいのが、留学生の日本での就職希望の高さである。今回の調査の協力者の約70%が将来的に日本での就職を希望しており、どれくらいの期間日本で働きたいと考えているかについては、5年以下と答えた学生が半数近くだったが、より長期的に日本で働くことを既に意識している留学生もいることがわかった。一方で、未定としている学生が30%近くおり、特に学部低学年の留学生にとってまだ将来の進路については明確に決められない、あるいはまだあまり考えていない時期であると考えられる。

このような状況を前提として、以下に考察を3つにまとめて述べる。

1) 専門志向の高さ

留学生が就職先を考える際に重視する点は、Aタイプ・Bタイプに共通して、大企業かどうか、給与が高いかといった企業の現状に関する要素よりも、自分の学んだ専門を生かすことできるかどうか、将来の発展が見込まれるかどうか、といった自分や企業の将来に関する要素に重点が置かれている。加えて、Bタイプでは、先進的・高度な技術に着目する割合が多いなど、就職活動の過程においても、専門知識への興味・感心の高まりがみられる。また、就職に役立つ(役立った)大学生活における活動や学習についても、留学生の多くが専門の研究や教科科目の学習を選択しているように、専門の学習と就職を結び付けて考えている傾向がある。これらは、留学生の専門志向の高さを示してい

る。この背景には、本学の理工系の留学生比率が高いことや、大学院レベルの留学生の数の多さも影響していると考えられる。一方で、人文・社会・教育系の留学生に関しては、専門性が企業選別に直結しにくい、あるいは専門性はマッチしても企業側のニーズがないことが多い。そのため、大学側にはこのような留学生に対する企業選択のサポートが求められていると言える。

2) ソーシャルネットワークの狭さ

Aタイプでは、回答者の多くが、就職活動時に利用するものとして、同じ留学生の先輩や同級生、インターネット情報などをあげており、日本人学生との情報交流の少なさが顕著であった。Bタイプではその状況は少し改善されるが、これで十分に就職活動における情報を収集することができるのか不安な部分がある。また、それ以前に、留学生が日本社会を経験する場が、学内の留学生ネットワークの中や、研究室に限られていることも考えられ、日本社会一般に関する知識や経験の不足も心配される。理工系の研究室では、研究室における拘束時間が長く、研究室単位での結びつきが強い一方で、それ以外の大学構成員との相互の交流や情報交換が希薄になりがちである。また、その忙しさから、サークル活動やボランティア活動など学内外の活動にかけられる時間も少ない。就職活動に実際に入る前にも、留学生が幅広い経験を持てるように、ソーシャルネットワークを広げるための支援が必要とされているのではないだろうか。

3) 就職に直結する具体的支援

留学生がどのような支援を求めているかについては、Aタイプ・Bタイプに共通して、「個別の面接指導」や「留学生を希望する企業との直接面接会」など、就職に直結する具体的支援への要望が高い。特に、留学生を採用したいと考えている企業にどのような企業があるのかは留学生にとって重要な点であろう。現在、群馬大学では、理工系の学生を対象にした合同企業説明会を学内で実施しているが、留学生のためのブースなど、よりグローバル人材としての留学生に特化した支援を考えることもできるだろう。また、Aタイプの留学生からは、就職活動を始めるにあたっての全体オリエンテーションや自己分析に関する支援にも高いニーズがあることがわかった。また、Bタイプでは、既に行われている支援についても、「やって欲しかった」という希望を述べる学生が存在した。全ての留学生に情報が行き届くような広報の方法や時期についても検討しなければならない。

最後に、本研究の限界について述べておきたい。本研究は、一つの大学の留学生のデータの調査分析に基づいた結果である。そのため、結果には、その環境要因が大きく影響している可能性があり、広く留学生一般にその結果を適用できるものではない。また、留学生の就職の状況は、その時々を経済社会状況に影響を受けやすい。今後も同様の調査を継続的に実施していきたい。

参考文献

- CASTRO Juan Jose・立川真紀絵 (2013) 「留学生の就職動向について—2013年3月卒業予定者と2013年9月及び2014年3月卒業予定者対象—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』17,pp.43-50, 大阪大学国際教育交流センター
- 佐藤礼子・金海花・廣瀬幸夫 (2009) 「理工系大学留学生の日本での就職に対する意識」『留学生教育』14,pp.49-56, 留学生教育学会
- 末廣啓子 (2013) 「地方圏における外国人留学生の就職に関する実態と課題 ～栃木県における外国人留学生のキャリアデザインと企業のグローバル化をめぐって～」『宇都宮大学教育学部紀要第一部』63,pp.279-295, 宇都宮大学
- 土井康裕 (2011) 「愛知県における留学生労働市場の分析—愛知県の平成22年度「県内留学生就職活動実態調査」を基に—」『名古屋大学留学生センター紀要』9,pp.5-12, 名古屋大学留学生センター
- 袴田麻里 (2009) 「静岡県における留学生の就職意識と企業(製造業)の留学生採用意識」『静岡大学国際交流センター紀要』3,pp.79-93, 静岡大学国際交流センター
- 廣瀬幸夫・槌田和美 (2011) 「理系留学生の内定状況と内定を得にくい留学生のための支援方法」『留学生教育』16,pp.47-56, 留学生教育学会
- 松井めぐみ・松岡洋一・岡益巳 (2011) 「中国人留学生の就職意識の特徴—岡山大学における調査から—」『留学生教育』16,pp.107-116, 留学生教育学会
- 山田明子・平田実・西頭由紀子 (2012) 「外国人留学生の日本企業への就職に関する意識調査—工学系大学院生を対象として—」『九州大学留学生センター紀要』20,pp.11-33, 九州大学留学生センター

Survey on International Students' Attitude toward Job Hunting and Career Planning
— A report on a basic survey (2) of Gunma University's international students —

SONODA Tomoko, TAWARAYAMA Yuji

In this study, we conducted a questionnaire survey regarding job hunting and career plan of all international students at Gunma University from 2011 to 2012 and analyzed the results. The results indicate that 1) international students decide on which company to apply to based on factors related to their own future and that of the company, 2) in their job search, they use the Internet and take help of other international students (seniors and acquaintances) as information sources, and they rarely ask help from Japanese students, 3) they seek career support such as individual guidance on a company' s interview process and joint interviews by companies that want to hire international students. In addition, we considered what kind of career support services are needed for international students, who are the target of this study.